

## 編集室から

今月の表紙写真は、昨年の9月にご縁を頂いた奈良での修験道で拝見した金色のご来光です。台風が通過した翌日に山に入りました。通常の道は土砂崩れで閉鎖。唯一通れた洞川村からの入山でした。当初は台風直後とあって、相当の覚悟をしていましたが、道中は特段の支障も無く、素晴らしい方々との修験の道は、忘れられない体験となりました。

今年もお誘いいただいたのですが、残念ながら地元能登で開催される地域づくり大会と重なってしまいました。先に、大会の全体会での司会進行役を仰せつかっていましたので、止む無く来年の参加を誓いました。

こうやって、振り返ってみると、貴重な体験もそれぞれに一度一度のもの。つまり、本当に一期一会なんだということを実感いたします。毎日同じ時刻に通勤し、同じように時が流れ、同じようなTV番組を見ていると、気づきにくいのですが、人生に再放送はありません。

このニュースを発行する直前、丁度旧暦の七夕の日、米国に一年間留学していた娘が帰国しました。留学ビザは途中帰国が認められていませんので、完全に一年間会えなかったのですが、近年のICT革命のお蔭で、無料の通話・TV電話等、複数手段でやり取りができたため、親としては多少気をもむ程度で済みました。

かつて会津を訪れた際、野口英世の母が英世に宛てた手紙を見たことを思い出しました。戻ってきてほしい、逢いたいとだけ切々と綴られた手紙。音信ままならなかった当時の母の子への想いが胸に迫ります。それからわずか百数十年後の今、有難い世の中になりました。

「可愛い子には旅をさせよ」と申します。子も遅しく成長したと思いますが、同時に親も成長させて頂いたのではないかと感じています。まるで、鏡のように。(は)



このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2012/09

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email [usric@neting.or.jp](mailto:usric@neting.or.jp)

2012/09

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

# 長 月



熊野・大峯山にてご来光  
by hama

私は富山県で生まれ育ちました。

何も無い田舎ですが、冬の天気の良い日に家の外に出ると、目の前に広がる立山連峰がまるで絵画のような美しさで、本当に素晴らしい景色です。海も山もあり、食べ物も美味しい・・・いい所で育ったんだなと、大人になって随分たつてからつくづく感じるようになりました。

富山には両親も祖母もいて、それが当たり前の事と思ってきましたが、今年の五月、祖母が九十六歳で大往生し、天国へ行きました。穏やかで一度も怒ったところを見た事がない本当に優しい祖母でした。

富山には「やまかわ」という創業八十年を越える老舗のアイスクリーム屋さんがあるので、祖母はこのアイスクリームが大好きでした。

(もちろん私も大好きです(笑)) 祖母は三、四年前から老人施設にお世話になっていましたが、亡くなる二、三日前にその職員の方に「アイスクリームが食べたい」とお願いしたそうです。職員さんとはつても気を使って下さって「ハーゲンダッツ」のアイスクリームを買ってきて祖母に食べさせたのですが、一口食べると祖母は「これじゃない!」と言ったそうです(笑)  
「そろそろ危ないかも」という連絡を実家の母

からもらい、それでも次の日には「今日は元気で風呂にも入ってもらったよ」という知らせを聞き、もう少し大丈夫かな・・・でも会いに行かなきゃ・・・と延ばし延ばしにしています。ある時、ふと「明日は絶対行くぞ!」と思いたつて会いに行きました。

祖母はほとんど食べる事もできなくなって、やせ細った体でしたが、私や母が話かけたり、何かしてあげる事に対して一回一回はつきりとした大きな声で「ありがと!」「ありがと!」と言っていました。すっかりした声なので、もう暫くは大丈夫かも・・・とその日は少し安心して帰りました。

ところが、次の日の早朝、祖母は母と叔父に抱っこをせがみ、「さよなら」と言つて亡くなったそうです。

それを聞いた時、「わーっ、さすがおばあちゃん!」と、とっても感動してしまいました。

「おばあちゃん、ありがと!」「生きているうちにもつとたくさん言えばよかったです。

そして私も祖母のように周りの人に「ありがと」と言いながら最後を迎えられる人生にしたいです。



【プロフィール】

(おだ あきこ)

一夫一男の三大家族。息子が

二人とも。(笑)。

写真はプロカメラマンである

夫の作品。暮らしの中から始め

る事業を展開中。

## 濱のつばき 『タフ』

ある大きな機関からの依頼で、高度な案件を提案実現するための調整能力・コミュニケーション能力を養う研修講座をやらせていただいた。単なるコミュニケーション研修と異なり複数領域にまたがるもので、難物であったが、それ故に逆に興味深く携われことができたのは、有難かった。

コミュニケーション関係で近年、関連図書が急速に出版されているもののひとつに、NLPがある。米国の大衆で開発された手法で直訳では神経言語プログラミングという。これが中々面白い。

開発者らによって、手法が細分化されていて独特の用語が夥しく、それらに惑わされて「NLPは難しい」との印象を持つてしまう人も少なくないらしい。

一方で、基本となる概念は、シンプルである。そのうちのひとつ。起こった現象・事象には、元々何の意味も無いが、それに自分で感情・価値観のフィルターを通して解釈し、善悪・好悪を判断しているのが、人間である。というものがある。これを応用すると、「過去の記憶は変えられる」ことになる。一見驚くべき話で、にわかには信じがたい。だが、よくよく自分の記憶を点検してみると、記憶は中立な現象そのものではなく、それに感情の味付けをした解釈の方が残っているものである。

これを証明する端的な例は、怒りなど強い感情が動いた記憶が蘇ってきた時である。当時の環境とは全く別なところに居ても、その人物が目の前にいるわけでもない

のに、「その時の感情」は、見事に、しかも瞬間的に再現される。あたかも「今、そこに居る」かのように。これは、記憶が事実を保存しているのではなく、感情も含めて保存している証拠ではなからうか。過去の事実は変えられないが、それに伴つて仕舞い込まれた感情やその元となつている価値観は変えられる。

そうすると、たとえば「あの時いじめられた」記憶は、「独りでも生きていく強さ・タフさを教えてくれた有難い出来事」に解釈しなおすことはできる。すると、嫌な奴らが有難い先導者に突如として変わる。嫌な記憶が、何故か晴れ晴れと感じられる。

このような概念は、必ずしもNLPで最初に提案されたものではないが、それによってこの概念が広まることは、明るい未来を啓く上で好ましいと思う。過去の忌まわしい記憶を一つ一つ丁寧に、解釈し直して、全てが学びであり、有難い教師に囲まれていた」と思えば、陰にこもる事無く前向きな歩みを始められることだろう。

世には、成功するためのコミュニケーション術として紹介されているNLPであるが、この他のさまざまなる理由から、個人的に「タフさ」を身に着ける概念・手法として捉えた方が、実利的なのではないかと考えている。

時流は激しく動いている。自然災害も激しさを増している。周囲や環境に文句を言つていても何も始まらない。まして、時代や地球気候に何を言つてもそれは愚痴に過ぎない。何が起ころうとも、前向きに捉え、逞しく前進できる能力が今、問われているのではないだろうか。

## 浮き草のごとく32 福井県立大学 地域経済研究所 江川 誠一 『会社再建の当事者として（元社長の謎）』

「走る実印」...元社長はこう呼ばれていた。以前は大手銀行に28年間勤務しており、銀行折衝能力や新事業の発想力は当社にとって貴重で、社長として申し分ない存在であった。ただ一点、案件を持ち込まれるたびに気前よく判を押し、多額の不良債権を発生させたことを除いては。

我々が経営に乗り込む前、取締役内での激しい対立は社内で公然の秘密だった。元社長らが投資事業の失敗を隠蔽、別の取締役が声を荒げて詰問するものの、溝は深まるばかり。我々は、全てを知る元社長に対しドラスティックな会社再建案を不退転の覚悟とともに示すことが鍵だと考えた。誰に許可を得るでもなく、名古屋、福岡、大阪で抱えていた業務を放り出し本社に常駐。元社長とは毎朝の情報交換、さくら水産<sup>1</sup>での昼食と和やかに接しつつも、決して単独行動を起こさせないように見張っていた。公布されたばかりの会社法関連本を読み漁りながら。

「こいつらなら任せられる」と信頼したのか、「こいつらなら抱き込むことができる」と踏んだのか。元社長が我々に貸付実態を全て暴露するまで、そう時間はかからなかった。間もなく居られなくなるだけでなく、法的に責任を追及されることは当然わかっていたはず。罪悪感や責任感を差し引いても、自らに不利になるようなことをあっけらかんと告白したのはなぜ？最終的に当社は元社長に、善管注意義務違反<sup>2</sup>による損害賠償金として約20億円を請求した。これにより自己破産に追い込む事になると告げると「わかりました。しますよ。それは」と即答。この潔さはなんだ。

元社長は常に雄弁だった。延滞先に対しても、責められる立場にありながら、不確かなことについては強気に断定口調で、矛盾を突かれると他人事のような口調で。元社長のペースに辟易した銀行員が、夕刻に私だけを再度呼び出すという事も幾度か繰り返された。現役銀行員にとっても謎だらけの元銀行員。

なぜ、元社長は取り返しのつかないような規模にまで手を広げたのだろうか。「最初は2~3億の損失だったが、それを取り戻そうとして、いつのまにか60億円の雪だるまになっていったという、なんとも単純かつ愚かなこと」だったのだろうか。見事なまでにことごとく紙切れになったという結果は、投融資先の数を考慮すると確率的にありえず、元銀行員としての審査能力を尊重すれば何らかの作為が疑われる。しかしながら資金を還流させていたとか、黒幕に操られていたとかいう形跡は見当たらなかった。

自己破産後、元社長は経営コンサルの会社を立ち上げて現在に至っている。同社の業務内容には「資金調達」や「銀行対策」とある。本当に煮ても焼いても食えない人だ。未だに、この人の掌の中で我々は踊らされていただけであり、あつというような種明かしが待っているのではないかという思いも、完全に拭い去る事ができないでいる。

1：大衆居酒屋チェーン店でランチも営業

2：取締役は「善良な管理者の注意をもって、委任事務を処理する義務を負う」（民法644条）とされているが、これに違反して会社に損害を与えること

## 『「街コン」をきっかけとした飲食産業集積づくり』 株式会社GARBAGE代表 川島 嘉浩

- 先月は「街コンの地域産業への貢献度」という視点から考えると
- ・ 出会いを目的として来街しており、決して観光ではない
  - ・ 開催される地域の多くは若者に人気の街が多い
  - ・ 衰退気味の街で実施しても来街する若者と地域で提供する事業者間にはニーズのミスマッチが起きる
  - ・ 街コンが開催される夜には大抵の商店街は店を閉めている
  - ・ 参加する飲食店にとっても瞬間風速的な効果は見込めるが、滞在時間などから持続性という点では疑問

といった理由から、地域振興には結び付きにくい？という仮説をまとめました。

今回は、上記のような仮説を基に飲食店の視点から『でも街コンを使って何かできないの？』というソリューションを考えてみたいと思います。まずここで重要となるのは『集積』というキーワードです。よく産業構造論などで『産業集積』という言葉が使われますが正に飲食店も「その地域における最も重要な産業集積」なのです。地域づくりという観点では、この集積単位での競争ということになります。地域の飲食店の紐帯が競争力の差になります。

本来は競争関係にあり、個人店が多いため接触がない飲食店同士が『街コン』というイベントを機に連携することで

- ・ 「街コン」に頼らない集積内イベントの開催
- ・ 他店メニューの出前システム
- ・ 顧客の相互流通(満席時に他店を紹介するなど)
- ・ 集積における統一したブランドづくり
- ・ 顧客基盤構築によるプロモーションシステム開発
- ・ 共同仕入れ/コスト部門共通化による原価率低減

など商売で大切な

- 『客数を増やす』
- 『客単価を上げる』
- 『来店頻度を高める』
- 『売価は下げない』
- 『コストを下げる』

を達成できる可能性もあります。

そして最も重要なのは、個々のお店が連携し互いに魅力を高め集積としての競争力を上げることで喜ぶのはお客様ですよね。特定のお店を指名買いすることはもちろんですが、実は多くのお客様は『どの街にする？』をまず意思決定時の最重要ファクターにしているのではないのでしょうか。だって私も、「恵比寿はかわいい子が多いから恵比寿で吞もうよ」なんていつも言っていました。

『富士の国から～大魔神のたび～』寸又峡温泉開湯50周年記念フォーラム  
「若者が地域を変える」(その2) 静岡県職員 溝口 久

1999年の「1000年の学校in南アルプス」の後、2007年に「全国まちづくりフォーラムin奥大井」が開催された。

そして2012年の今年寸又峡温泉の開湯50周年だ。川根本町まちづくり観光協会長の望月さんから何か考えてみてくれとのリクエストがあり、そこで考えたのが「若者が地域を変える」と題したフォーラムだ。

静岡県のまちづくりで活躍している全国的に有名なキーパーソンは、右手にスコップ左手に缶ビールを合言葉に市民協働でせせらぎの街に三島を蘇らせたグラウンドワーク三島の渡辺豊博さん、今や世界に打って出ている富士宮焼きそば学会の渡辺英彦さん、富士市産業支援センター f-Bizのセンター長で起業支援家として11年間で850件以上の新規ビジネス立ち上げを支援している小出宗昭さんの三人だ。

この方たちの後を追う若者たちの活躍が最近目立ってきている。県の観光局でもこうした若者に着目し、「しずおかニューツーリズムネットワーク」と称した定期的な会合を持つようになってきている。

ここはひとつ若者に光を当てたフォーラムをやると面白いと思い企画した。

まじめな大人たちからは「それが寸又峡活性化のためになるの？寸又峡活性化についての議論はないの？」と言われた。

一つのフォーラムで町が活性化するなら苦労は shouldn't、でもきっかけづくりぐらいにはと表面上は言ったりするけど、そんなことは考えていない。花火も夏祭りも人を寄せるイベントだろう、このフォーラムも「交流と学び」で人を寄せる手段なのである。

若者を中心におくことで、若者の参加が期待できる。なにしろSNSを駆使する彼らの口コミの情報発信力は高く、集客力そして開催後の内容を知らせる能力を買った。年配のお客が多い寸又峡温泉の新たな顧客開拓につながるという皮算用ももちろんある。

さて、いよいよ本番当日を迎えた。寸又峡温泉地にはホールはない。旅館の宴会場を会場



に、参加の皆様には申し訳ないが畳の上の座で我慢していただくようになった。しかも150人も人が集まったからスペース的に余裕はない。12:30スタートの16:00終了の長時間を思うと少々気が重くなった。

基調講演を誰に頼もうかと考えたときに、前文で紹介した1999年7月に寸又峡はじめ本川根町で開催した日本上流文化圏会議「1000年の学校in南アルプス」をプロデュースし、現在は江戸川大学で教鞭をとり若者に常に触れている鈴木輝隆教授を思い浮かべた。

「若者の『素の力』が日本を育てる」と題目に、あえて田舎を選択しクリエイティブな活動をしている若者や、鳥取県の智頭町で自然のままに育てる、親は手を出さない、あるがままにということを実践している保育グループのお話を頂戴した。

さて、いよいよ若者の出番だ。

NPO法人日本上流文化圏研究所事務局長の鞍内大輔さんは、早大の学生の時に「1000年の学校in南アルプス」を手伝ってくれた。小学校の体育館をタイトルに相応しい会場にするために、他の学生らと地元工務店、設計事務所の方々と共同してほぼ一週間をかけて周りの山から切り出した木や竹、蔓を使って見事に設えてくれた。

その彼が大学院を終了すると山梨県早川町にある日本上流文化圏研究所に立ち上げから尽力することになった。地域で暮らすことに誇りを持ち続けられるような地域づくりを展開し「あきらめムード」を断ち切る。やる気のない人のモチベーションを上げるための工夫、そのためには対話しかないと言う。鞍内さんが早川町民になった当時2000人近くいた人口は今や1246人、町で起業することや物産開発などに支援をしているが、なにせプレイヤーが少なくなり過ぎてきている。もはや支援ではなく自らビジネスを興していくことこそ必要な気がした。



二人目からは静岡県の若者6人衆が続く。(つづき)